



お人好し職人のぶらり異世界旅 3

ALPHAPOLIS

電電世界
DENDENSEKAI

アルファライト文庫 

ココ

Bランク冒険者の犬獣人の女性。
卓越した剣の腕前を持つ。

キヤリー

Aランク冒険者。
女子力が抜群に高いおじさん。

マアロ

食いしん坊なエルフの女の子。
回復魔法が得意な神官。

メア

モアの姉で、
異世界に来た良一の
妹になった女の子。
真面目で勉強熱心。

モア

良一の妹になった女の子。
いつも元気いっぱいな
ムードメーカー。

みつちゃん

腕時計型端末のAIだったが、
人工人体を手に入れた。

石川 良一

電気工事店を営んでいた青年。
分身をはじめ、様々な手
能力を駆使して今日も人助け。

一章 王都での生活

小さな電気工事店を営んでいた青年、石川良一。

両親を亡くして孤独な生活を送っていた彼は、たまたま不思議なサイトを閲覧したことをきっかけに、異世界——スタールリアへと転移することになった。

異世界では借金にあえいでいたメアとモア姉妹を義妹として養いながら、犬獣人の女剣士ココやエルフの神官マアロといった仲間とともに旅を続け、数々の手柄を立てた結果……彼の現在の肩書は、カレスライア王国の士爵。貴族である。

良一が士爵に叙された陞爵式から約半月経ち、王国の国政に関する一大行事、王国会議もいよいよ今日が閉会の日だ。

一行は諸々の事情でいまだ王都ライアに滞在しているが、下っ端貴族になりたての良一が参加すべき会議はないため、日中は皆と王都観光をして回る日々を送っていた。

「良一兄ちゃん、今日はどこに遊びに行こっか!？」

いつも元気な下の義妹のモアが、楽しそうに良一に声をかけた。

「そうだな……今日は王都の外にでも少し出てみよう」

男爵以下の王国貴族は開会式と閉会式のどちらか片方にしか参加しないという暗黙のルールがあるらしく、開会式に出席した良一は今日も自由行動だ。

「ご一緒いたします」

外出の準備をしている良一とモアに、人格保持型AIの「みっちゃん」が柔らかに微笑みながら頷いた。

もとは良一達の腕時計型デバイスのOSだったものの、女性型の人工人体にインストールされた今では、見た目は普通の人間と変わらない。

体を得たことで、良一の従者——あるいは助手的な役割がすっかり板に付いている。

「みっちゃん、これからの王都の予定は何があるんだっけ？」

「直近では、王国立学園への入学試験があります。あとは、Aランク冒険者のミレイア様との合同クエストですね。ですが、ミレイア様は王国会議終了後に王都を離れる用件があるので、延期になっております」

ココの妹である双子のミミとメメは、母親のマナカとともに王都に引越し、王国立学園への入学を目指している。

ココが実技、マアロが座学の教師役として面倒を見て、今まさに追い込みをかけている最中だ。

二人とも地元のココノツ諸島にいた時から勉学と鍛錬に励んでいて優秀だったが、慢心せずに最後まで全力を尽くす姿勢である。

マアロは合格間違いなしと太鼓判を押している。

実は、王国立学園を受験するのはミミとメメだけではない。

「メア姉ちゃんも、勉強を頑張ってるよ」

「そうだな、メアも一緒に仮受験するんだったな。突然のことでびっくりしたよ」

ちょうど一週間前、上の義妹のメアが改まって「お願い」に来た時のことを、良一はしみじみと思い出した。

「良一兄さん、お願いがあるのですが」

その日の夜、就寝の準備をしていた良一の部屋に、メアがマアロを伴って入ってきた。

「どうしたんだ、メア？」

良一が促すと、メアは躊躇いがちに切り出した。

「ミミさんとメメさんが受験する王国立学園の試験を、私も受けてみたいんです」

「王国立学園の……入学試験をか？」

メアもミミとメメと一緒にマアロの授業を受けていたのは知っていたが、受験を考えているとは思っていなかったため、良一は思わず聞き返した。

「はい」

メアが真剣な眼差しで頷くと、隣に付き添っていたマアロが一步進み出る。

「メアも私の授業を真面目に受けて、しつかりついてきている。スタートが遅かったハンデはあるけれど、良い線まではいけると思う」

年長の割に大人げない言動が目立つマアロも、教え子の前では教師の顔だ。

「メアが受験をしたいなら、止める理由はないよ。それで、受験をするために、俺は何をすればいいんだ？」

良一が受け入れてくれ安心したのか、メアはほっとした表情で一枚の紙を差し出した。

「なるほど……。今からだと、この模擬入学試験を受けることになるのか」

王国立学園では、同じ日に正規の入学試験と模擬試験の二つが行われるらしい。

正規の試験が入学を決定するためのものであるのは言わずもがな。一方、模擬試験は同じ試験内容だが、主に自分の実力を確かめるための制度で、受験料は安い。

元々、王国立学園は貴族の子供のための学園だったが、二代前の国王が王国中の才能ある者を集めるためにこの制度を作った。

非貴族階級の子供も受験することができて、優秀な成績をあげた子供を身分にかかわらず学園に入学させた前例もあるという。

今では庶民も正規の入学試験を受けることができるようになったので、本来の意義は失

われているが、実力を試したい者のために制度が残っているらしい。

「その模擬試験で、自分の実力を試したいんです」

「わかった。俺もできる限りサポートをするから、試験頑張れよ」

「はい！」

良一の励ましの言葉を受けて、メアは嬉しそうに笑った。

とはいえ、サポートするといっても勉強を教えることなどできないので、良一としては邪魔にならないようにするのが精一杯である。

差し入れのお菓子作りをしたり、モアと一緒に勉強部屋代わりの宿屋から出ていたりして、メアが集中できるようにするしかなかった。

——そんなわけで、このところ日中は、良一とモアとみつちゃん、Aランク冒険者であるキャリーの四人で観光することが多い。

しかし本日は、キャリーはエルフのAランク冒険者のミレイアに誘われて外出しているので、これからモアとみつちゃんと良一の三人で遊びに行く。

「じゃあ、少し外に出て、ピクニックだな」

「行こう行こう！」

「南と東の草原は前に行ったから、今日は西に行こうか」

「了解しました」

無邪気にはしゃぐモアに急かされて、良一達は城下の大通りを足早に歩いていく。王都の中心には王城があり、街はそこから円状に広がっている。

良一達が滞在している宿は城の南東にあるため、西門に行くには少し長い距離を歩かなければならない。

商業地区に比べると人通りは少ないが、通りには多くの工房や専門的な店が軒を連ねており、活気に満ちている。

「西側は遠いし、特に用事がなくてあまり来なかったけど、職人街になっているのか。マナカさん達の新居の家具はココノツ諸島から運んできて、あまりこっちで購入するものはなかったからな」

「良一兄ちゃん、肩車して」

「人も少ないし、良いぞ」

モアを肩車しながら職人街を西へと歩き、数十分ほどで王都の西門にたどり着いた。

この門は職人街に近いこともあって、大量の資材や商品を運ぶ馬車、竜に牽かれた竜車が行き交っている。

検問は商人用と一般用で分かれているが、良一達はそのどちらでもなく、利用者が少ない貴族用へと向かった。

良一は、陞爵式の翌日に使者から渡された貴族の証であるメダルを取り出して、最近覚えてた歌を口ずさむ。

「士爵になれば赤メダル、男爵になれば橙メダル、子爵になれば黄メダル、伯爵になれば緑メダル、辺境伯になれば青メダル、侯爵になれば藍メダル、公爵になれば紫メダル、王様になれば虹メダル」

メダルの表には王国の国旗に使われているマークと現在の王の名前、裏面には良一の名前と爵位に応じた意匠が施されていた。

「そのお歌、モアも知ってる！」

「王国民なら誰でも知っている歌らしいな。俺はココに教わるまで知らなかったけど」
王国の正式な貴族になると、その証拠として王家からメダルが授与されることは一般にも知れわたっているため、歌になって王国全土に広まってるらしい。

またこのメダルには、ドワーフの特殊な技術による加工や、王家の秘伝魔法も施されており、偽造や密売などを防いでいるそうだ。

「ココ姉ちゃんはお歌をいっぱい知ってるよ」

モアは肩車されながら、ココから教わったという歌を陽気に歌いはじめた。

周りに子供の姿が少ないこともあり、通行人の視線が良一達三人に集まる。

「モア……少し声を落として歌おうか」

そんなやり取りをしているうちに、貴族用の検問を行う騎士の前に到着した。「メダルを提示していただけますでしょうか」

騎士に誰何されたので、良一はモアを肩車から降ろしてメダルを見せた。

「拝見いたします」

騎士が一言断りを入れて身につけていた指輪をメダルに向けると、何かを読み取っているのか、指輪とメダルの間に赤い光が走った。

確認手続きはそれだけで終わり、騎士は敬礼をして他の衛兵に開門の合図を送る。

商人用の門では積荷を改められることもあるが、良一達は手荷物の検査などもなく、すんなり門を抜けることができた。

街を囲む城壁の外に出ると、自然の平野が一望できる。

微かに花の香りがする風がスウィーツと体を通り抜けて気持ちが良い。

「良い風が吹いていますね」

みつちゃんは少し目を細めて、風になびいたセミロングの髪を耳にかけた。キャリアウーマン風の容姿が相まって、そんな女性的な仕草が凄く様になる。

「良一兄ちゃん、見て見てー!」

モアもみつちゃんの真似をして髪を何度もかきあげて耳にかけようとしますが、最近キャリーに短く整えてもらったばかりなので上手くいかず、大人の女性にはほど遠い。

「うーん、もう少し髪が伸びないとできないんじゃないか?」

「えー、つまんないの……」

頬を膨らませるモアを宥めながら、良一は前方に見える小高い丘を指差して、今日の目的地の説明をする。

「さて、この前ミレイアさんが遊びに来た時に聞いた話じゃあ、王都から一時間ほど歩いたあの丘の向こうにたくさんの花が咲いていて、とても綺麗なんだから。そこまで行ってみようか?」

「じゃあ、綺麗なお花をお姉ちゃんにプレゼントする!」

「良いお土産になりそうだな」

すぐに機嫌を直して元氣一杯に歩きはじめたモアを、良一とみつちゃんが追いかける。道行く人はまばらだったので、三人で歌を歌いながら歩いた。

多くの人が歩いたためか、丘に続く道は土が踏み固められていて歩きやすい。

王都近郊では多くの冒険者がモンスターを駆除して日銭を稼いでいるため比較的安全で、メラサル島と違ってモンスターに襲撃される心配はほとんどない。

丘を登りきると、そこには赤や黄色の花が一面に咲いていた。

「ふう、やっと着いたな。しかし……確かに、ミレイアさんが勧めるだけのことはあって、見事な景色だ」

「色鮮やかに咲き誇っていますね」
「わー、きれい」

モアは早速花園に駆けだしていく。

みっちゃんは手近な花を何本か摘むと、器用に花冠を作ってみせた。

「みっちゃん、何作ってるの？ モアにも教えて！」

モアは早速興味を示し、みっちゃんに教わりながら一生懸命に作りはじめた。

良一は花を踏みつぶさないように注意しながら木陰に移動して、モアとみっちゃんが互いに自作の花の冠を頭に載せて笑いあい、遊ぶ様を見守る。

モアはお土産としてメアやマアロ達の方も作ると宣言して、みっちゃんと協力しながら花の冠を作りはじめた。

「二人とも花の冠作りに集中しているし、時間も良い感じだから昼食の準備でもしておくか」

モアの面倒はみっちゃんに任せて、良一は花園から少しだけ離れて開けた場所に移動し、アイテムボックスから取り出した簡易テーブルや調理器具を広げて料理をはじめた。

この花園に来るまでにそれなりの距離を歩いて程よくお腹が空いていたので、少しガツツリしたものを食べたかった良一が選択したメニューは炒飯。米を炊くのは手間がかかるため、レトルトのご飯を使い、具材は卵と焼豚、刻んだネギだけのシンプルなものだ。

一緒に作った中華風スープを煮込んでいると、匂いにつられてモアとみっちゃんがやって来た。

「良一兄ちゃん、モアね、一杯作ったんだよ」

モアは両手で抱えたたくさんの花冠を得意げに見せる。

「皆の分の冠は全部できたのか？」

「うん！ お姉ちゃん達のもあるし、キャリーさんやフェイ姉ちゃんの方も作ったよ！」

「そっか。こっちも昼飯が完成したところだよ。手を洗ったら食べようか」

「わかった！」

昼ご飯を食べ終えて少し食休みする良一を横目に、モアは契約した風の精霊、かーくんを呼び出して再び花畑を元気良く走り回りはじめる。

ここまで歩いてきたというのに、まだ元気があり余っているとは……子供の無尽蔵な体力に感心する良一だった。

「モア、そろそろ帰ろうか」

太陽が少し傾きはじめていたので、良一は帰り支度をはじめた。

帰りも来た時と同じ道を歩かなければならない。まだ明るいのが、王都に着いたらちよと夕方くらいだろう。

いつの間にかモアは他の家族の子供と仲良くなっており、複数の子供の輪に加わって遊んでいた。

「良一兄ちゃん、あとちよつとだけ」

モアは知り合った子供と別れるのが名残惜しいようだ。

「しかたないな……ちよつとだけだぞ」

「良一さん、よろしいですか」

モアを見守る良一に、みっちゃんが声をかけた。

「どうした？」

「はい。少し気になる現象が起きていたので、報告を。センサーの誤作動と思いましたが、以前にも似たことがあります」

「なんだ、その現象って？」

「大精霊様にお会いした時と同じ現象です。視覚情報と魔素流動情報との不一致が出ております」

「つまり……目に見えている景色と実際の地形に違いがあるのか」

「はい、該当部分はあの周辺です」

みっちゃんが指差したのは、花畑の一面。

一見すると他の場所と変わらないように見えるが、よく観察していると、近くを通る人

が不自然にその場所を避けているのがわかる。

「何なんだろうな」

「いかがなさいますか」

「わざわざ不審な場所に近づくのもなあ」

しかし、みっちゃんと相談している間に、モアが同い年ぐらいの女の子と一緒にその場所まで走っていつてしまった。

良一はモアを呼び止めようとしたが、時すでに遅し。モアはそのまま不思議な場所に足を踏み入れて、姿を消した。

「モア！ みっちゃん、一緒に来てくれ」

良一とみっちゃんは慌てて駆けだして、モアが消えた空間に飛び込んだ。

一瞬視界が揺らいだ後、それまで周りにいたはずの人影が見えなくなり、代わりに、すぐ目の前にモアが立っていた。

モアは急に現れた良一に驚いて目を丸くする。

「あれ、良一兄ちゃん？ もう帰るの？」

「モア、大丈夫か」

「くすぐったいよう。どうしたの？」

あまりに呆気なく見つかって少々拍子抜けしながらも、モアの体に触れて無事を確かめ

ていると、突然背後から声をかけられた。

「あらあら、お久しぶりね〜」

振り向くと、そこには以前湖で出会った大精霊様の姿があった。そして、その隣にはモアがこの場所に入った時に一緒にいた子が立っている。

「ご無沙汰しております、大精霊様」

「ごめんなさいね〜、うちの子がモアちゃんを誘って、精霊の狭間に連れ込んでしまったみたいで〜」

「精霊の狭間ですか？」

「そうそう。この場所は人間界と精霊界が交わる場所で、普通の人だと入れないんだけど、あなた達は私の祝福を受けているから入れたみたいねえ」

「そちらのお子さんは、大精霊様のお子様ですか？」

「そう。私と旦那様の力を受け継いだ子よ。私の祝福を受けたモアちゃんを見て一緒に遊びたくなつたみたい」

「ビックリしましたよ。モアの姿が突然消えてしまつて」

良一がため息とともにそう吐き出すと、モアと一緒にいた少女は自分が責められていると思つて大精霊の後ろに隠れてしまった。

「……ごめんなさい」

「良一兄ちゃん、モアがセラちゃんと遊んでいたの！ セラちゃんは悪くないの」

モアは少女を庇つて良一の足にすがりつく。

「ううん、モアちゃんを連れてきたのはわたしだから……」

「セラちゃんって名前なのかな？ ごめんね、俺も驚いちゃつて」

仮にも精霊とはいえ、子供相手に大人げなかつたと良一が反省していると、大精霊が話を途中で遮つた。

「はいはい、ここでお話は終わり〜」

「良一君、ここは皆でドーナツでも食べて仲良くなりましょう。前に貰つたドーナツをあげたら、この子も気に入つたみたいでね〜。悪いけど、またいただけるかしら？」

「もちろん。これで仲直りしてくれるかな」

良一はアイテムボックスからドーナツの箱を取り出して、セラの目線に合わせて差し出した。

「うん」

セラは笑顔でドーナツの箱を受け取ってくれた。

「はい、仲直り〜。問題を解決した私にも〜、ご褒美があつてもいいんじゃない〜？」

大精霊はボンと手を叩くと、しれつと言つてのけた。

良一は苦笑しつつも大精霊にドーナツの箱を差し出す。

「そうですね、ありがとうございます」

「あらあら、ありがとうございます」

ドーナツを食べながらしばし雑談を交わした後、良一達は大精霊とセラに別れを告げて、王都へと帰ったのだった。

宿屋に戻ると、メアとミミとメメは勉強を終えて一息ついていたところで、三人ともモアがお土産として渡した花の冠を頭に載せて、とても喜んだ。

勉強の疲れも和らいで少しリラククスできたようで、仲良く今日の出来事などを話して、寝るまでの時間を過ごした。



王国会議が閉会して数日が経ち、王国立学園の入学試験の日を迎えた。

「それでは、行ってまいります」

「私も頑張つてきます」

王都の中心部にある王国立学園の校門の前で、双子とメアが見送りに来た全員の前で元氣良く宣言する。

「三人とも私が教えた。だから大丈夫。……これ、お守り」

マアロはそう言つて教え子達を激励すると、少し照れくさそうにお守りを手渡した。

「ありがとうございます、マアロさん」

マアロが渡したのは、エルフに昔から伝わる伝統のお守りだという。

生まれてこのかた裁縫などしたことがなかったマアロが、メア達が眠った後にキャリーに教わりながら一生懸命に作ったものだ。

マアロの夜なべを知っていた良一は、お守りを受け取った三人が喜んでる姿を見て、自分まで嬉しくなった。

「これだけ皆に手伝ってもらったんだから、きっと大丈夫。悔いのないように全力で挑んできなさい」

ココは妹達とメアの頭を順番に撫でて、力強く励ました。

「私も応援しているわ。今日の夜は腕によりをかけてご馳走を作って待つてるからね」

「お姉ちゃん、ミミちゃん、メメちゃん、頑張つてね！」

「会場の雰囲気呑まれないように、まずはリラククスしてな」

三人の勉強をずっと見守ってきたキャリーやモア、良一も、それぞれに応援の言葉をかけて三人を送り出す。

最後にココと双子の母親であるマナカが声をかけた。

「近くで見えていた私には、三人がどれだけ頑張つてきたか、よくわかります。その努力を

信じれば、必ず結果はついてきますよ」

皆の応援の言葉を受けた双子は、緊張しながらもどこか楽しそうに学園の門をくぐり、他の受験生達の中に消えていった。

模擬試験会場は正試験会場とは別なので、メアは一人で会場に向かったが、その足取りは確かだ。

これなら心配ないだろう——良一は三人の後ろ姿を見送りながら、そう確信した。

しばらく三人を見送った後、一行はマナカ達の新居に場所を移して、入学試験が終わるまでの時間を過ごすことにした。

メアはキャリーとココとみっちゃんに構ってもらって上機嫌だ。

良一が楽しそうに遊ぶ四人を見て、マアロがやってきた。

「良一、心配じゃないの？」

「試験のことか？」

「そう」

マアロはマナカ達の家に来てから時計ばかりを気にして、落ち着かない様子だ。

「三人とも実力は充分なんだろう」

「それはそう。でも、心配は心配」

「俺はあまり勉強をしてこなかったし、直接教えたわけじゃないから、試験がどのくらい難しいのかわからない。そりゃあ、確かに心配だけど、同じだけ信頼もしている」

「そう……そうね。私も信頼している」

それで吹っ切れたのか、マアロは自分のアイテムボックスから菓子を取り出して食べはじめた。

午後になり、入学試験の半分が終わった。

午前中は筆記試験、午後から実技試験というスケジュールなので、今頃三人は実技試験の最中だろう。

自分が担当した筆記試験の時間が過ぎて、マアロは少し落ち着いてきた。

文武両道を掲げる王国立学園では、勉強だけでなく実技も重視されている。

武家の娘で、幼少期から鍛練を積んできたミミとメメに関しては、実技の心配はなかったものの、メアは数カ月前までのただの町娘だった。

しかしそこは、持ち前の真面目な性格や、キャリーやココやミレイアといった高ランクの冒険者の積古のおかげもあって、みるみる実力をつけている。

貴族でもこれほどの実力者から直接教えられる機会は滅多にないはずなので、充分通用すると良一は思っていた。

「さて、晩ご飯の準備をはじめようかしら」

「そうですね。夕方には試験が終わりですから、それまでには早いのご馳走を作らないといけませんね」

キャリーが音頭おんどうをとり、マナカと一緒に夕食の準備をはじめた。

「俺も手伝います」

「モアも！」

結局、全員が料理の手伝いを申し出たものの、一般家庭の台所では狭せますぎて入りきらないので、良一達はアパートの共用部である中庭に調理器具を広げて料理をすることにした。

「さあ、メアちゃんとミミちゃんとメメちゃんの好物を作っていくわよ。良一君は下ごしらえをお願い」

「了解です」

キャリーが中心になって、料理を次々と完成させていった。

「さて、料理は冷めないようにアイテムボックスに入れておかないと」

「そうですね。私にお任せください」

料理を鍋なべや大皿ごとアイテムボックスに収納していくみつちゃんを横目に、マアロがソワソワした様子で良一に話しかけた。

「良一、そろそろ迎えに行く？」

「そうだな、今から向かえばちょうど良い時間か」

「モアも行く！」

「私とマナカさんは部屋で迎える準備をするので、ここに残ります」

テーブルに食器などの運び込みをしてから、みつちゃんとマナカ以外のメンバーで学園に向かった。

良一達が到着した頃には門の前に人だかりができており、受験生を待つ付き添いの人で一杯だった。

しばらく待っていると校門が開き、受験生達が続々と出てきた。

スッキリと晴れやかな表情をした者もいれば、絶望で顔が真まつ青あおな者もいる。

「あつ、ミミとメメです」

ココが早速妹を見つけて手を振った。

大勢の受験生の中でも双子の犬耳が目立って、ミミとメメの居場所はすぐにわかる。

二人とも結構な距離があるのにこちらに気がついたのか、手を振り返してきた。

「あつちからメア姉ちゃんも来た」

肩車したモアが指差す方を見ると、人垣ひとがきの間から青色の髪がちらちらと覗のぞいていた。

人混みを掻かき分けてやってきた双子の表情は、やることはやった、という達成感に満

ちっている。

「ただいま」

二人に少し遅れてメアも良一達に合流し、晴れ晴れとした表情を見せた。

「遅くなってすみません」

「おかえり。三人ともやりきった？」

「はい、全てを出し切りました」

「なら、上出来」

メア達の表情を見て安心したのか、マアロは三人の頭を撫でて褒めている。

ココも笑顔で三人を労い、皆でマナカ達が待つアパートへと移動した。

アパートの部屋の扉を開けると、様々な料理がテーブルの上に並べられていて、笑顔のマナカ達が迎え入れてくれた。

「筆記試験はマアロさんの授業で教わった内容がたくさん出ていました」

「メアちゃんの言うとおり。マアロさんが試験問題を作ったんじゃないかと思っただけです」

当然、食事中的話題は試験の内容や手応えが中心となった。

「でも、王国立学園の武術教官は強かった。筋肉もムキムキだった」

「本当に、うちの道場の人でも師範レベルじゃないと勝てないんじゃないかな」

教官の実力を思い出して、ミミとメメが顔を見合わせる。

「多分、私もその人と模擬戦をしました。良一兄さんと同じくらい強かったです」

良一の方針もあって、メアは実際の戦闘経験はなく、専らココやキャリーから護身術や精霊術を学んでいただけだ。

模擬試験のためにココと練習していた時も、精霊術での遠距離攻撃を重点的に学んでいたので、接近戦の経験はほとんどないといっている。

「私とコハナの精霊術も破られて、最後は頭をコンと叩かれて負けました」

メアは風の精霊のコハナと特訓して、かなり精霊術が上達していたが、完敗だったらしい。それでも、悔いは残さなかったのか、表情は明るい。

美味しい料理を食べながら他の受験生の様子などを聞き、良い雰囲気です。食事は終わった。

メアは疲れてしまったのか、ココ達の家を後にして宿屋に戻って早々にマアロと一緒に床に入った。しかしメアはまだ興奮が冷めていなければ眠ろうとはせず、宿のラウンジで良一と話している。

「メア、今日の試験を受けて良かったか？」

「はい！ 私と同じ年ぐらいの男の子が、筆記試験の時にあつという間に書き終えて眠りはじめたり、私よりも小さい女の子が実技試験の時に試験官から一本奪っていたり……色んな人がいました」

「それで、来年は本試験も受験してみたいかい？」

「本試験ですか？ 私は良一兄さんと出会って以来ずっと幸せです。良一兄さんが良かったら……これからもずっと、一緒に旅をしたいです。だから、たぶん本試験は受験しません」

「じゃ、じゃあ、メアとモアと一緒に、これからも旅をしような！」

メアの真摯な思いを受けて、鼻の奥がツンとするのを感じたが、それを悟られまいと、努めて明るく振る舞う良一だった。



王国立学園の合格発表は試験から一週間ほどで行われた。

マナカ親子と良一達全員で足を運んだものの、あまりに人が多くて、ココとミミとメメだけで掲示板を見に行っている。

「結果発表、ドキドキする」

こんな時でも息ピッタリな双子を先頭にココが続いて人混みをかき分けて、結果が貼り出された掲示板にたどり着いた。

合否が発表される正午直後は人が多すぎて大変だと聞いたので、良一達は時間をずらして訪れたのだが、掲示板の前はいまだに多くの人でごった返している。

「名前があつた!!」

「おめでとう、ミミ、メメ！ 学園でたくさん学びなさい」

三人の喜びの声は離れている良一達にも聞こえ、皆密かに安堵の息を漏らす。戻ってきたミミとメメに代わる代わるおめでとうを言って皆で祝福した。

二人の合格を知って、マアロもやっと肩の荷が下りたのか、安堵の表情を浮かべている。「メアちゃん、掲示板を見に行った方が良いよ」

「確かに。自分の目で見た方が良いはずですよ」

理由は詳しく教えてくれなかったが、ココ達はメアにも掲示板を見に行くように言うので、結局全員で掲示板を見に行った。

「あつ、ミミさんとメメさんの名前が特待生枠にありますー！」

「へえ、立派なものだな」

単に合格しただけでなく、数少ない特待生枠に二人が合格しているとは。一緒に受験したメアも驚いている。

双子は照れながらも合格掲示板の横を指差した。

「模擬試験者成績一覧^{いちらん}? そうか、模擬試験も得点の順位が張り出されているのか」

良一は背伸びしてリストを覗き込む。

「良一兄さん! あ、あ、あの一位のところなんですけど」

メアに服の裾を引つ張られて、模擬試験成績順位の一位の名前を見ると……メア・イシカワと書かれていた。

「夢じゃ……ないですよね」

「間違いなく、メアの名前が書かれてあるな」

「やったー!!」

「お姉ちゃん、すごい」

「本当に凄いじゃない、メアちゃん。模擬試験も本試験と同じ難易度^{なんいど}なんだから、首席合^{しゅせき}格^{かく}と言ってもいいくらいよ」

「モアやキャリーにも褒められて、メアは嬉し涙を瞳^たに溜^{たま}めながらピョンピョンと飛び跳^はねる。

そんなメアの年相応な姿は微笑ましく、良一にとっては誇らしくもあった。

「今日^{けふ}はご馳走^{ちそう}だな。ミミとメメの特待生^{とくたいせい}での合格と、メアの一位も合わせて盛大^{せいたい}に祝^{いわ}わないと。記念に写真でも撮^とっておこう」



良一が腕のデバイスで掲示板とメアの写真を撮っていると、学園の関係者らしき人が近づいてきた。

「失礼ですが、メアさんのご家族の方でしょうか」

「はい、そうです」

「模擬試験の成績優秀者には記念のメダルをお渡ししておりますので、よろしかったら学園の事務所で受け取ってからお帰りください。模擬試験メダルがあれば、来年の本試験の際に優遇措置を受けられますよ」

どうやら、模擬試験受験者で一定の点数を超えた受験者には、成績優秀の証明としてメダルが授与されるらしい。

「良一兄さん、取りに行っても良いですか」

「もちろん。メアの努力の結果なんだから、是非取りに行こう」

事務所で受け取ったメダルは、学園の校章が入った銀製のものだった。

メアはずつしりとした重みのあるメダルを持って目をキラキラさせている。

三人とも期待以上の成績を収めたこともあり、その日はいつになく楽しい一日になった。



王国会議が閉会して、名だたる貴族達もそれぞれの領地に戻り、王都も日常を取り戻して、少しだけ静かになっていた。

「モア、プレゼントは忘れずに持ってきたのか？」

「もちろん！ ちゃんとアイテムボックスに入ってるよ」

今日はメラサル島の領主、ホーレンス公爵の娘であるキリカの誕生日会が開催される日だ。

良一達は精一杯めかし込んで馬車に乗っている。

実際のキリカの誕生日はまだ先で、本島なら島に戻ってから行う予定だったらしいが、招待客などの事情もあって、王都の屋敷で早めに誕生会を開くことになったのだそう。

ホーレンス公爵としては、将来キリカが社交界にデビューする際の根回しという意図もあるのだろう。

「相変わらず大きな屋敷だな」

既に夕暮れ時で辺りは暗くなり始めていたが、公爵邸のたくさんの窓からは明かりが漏れていて、遠目にもその規模がわかる。

良一が王都の公爵邸を訪れるのは、キリカが一級犯罪者集団「不殺集団」に誘拐されうになったのを助けるために駆け付けた時以来だ。

この襲撃で屋敷の一部が壊されたが、魔導機を用いた修理業者の手で瞬く間に修復されている。

馬車が公爵邸の車回しに到着し、良一はモアの手を引いて降り立った。

「石川様、本日はお越しいただきありがとうございます。キリカ様も大変喜ばれます」
公爵に仕える執事が一礼して、一行を屋敷へと招き入れた。

節目である十歳ということもあり、誕生会は盛大なものになるようで、一番仲良しなモアとその保護者の良一だけでなく、メアやココ、マアロ、キャリーまでも招待を受けている。

出席者は公爵が治めるメラサル島の貴族が多いが、同じくらい王都の貴族も集まっていた。

エントランスホールで迎りを見渡していると、ココの故郷、ココノツ諸島の外交官であるスギタニが笑顔で近づいてきた。

「やあやあ、石川殿に、オレオンバーグ殿ではござらんか」

「あら？ スギタニさんじゃない。お元氣そうね」

スギタニと付き合いが長いキャリーは、優雅な動作で一礼した。

「おお、オレオンバーグ殿は、今宵も煌びやかでござるな」

メアやモアを大人の会話に付き合わせるのは退屈だろうと思ひ、良一はココとマアロに頼んで二人を先に会場に連れて行つてもらった。

キャリーと一緒に残った良一は、スギタニと立ち話をはじめた。

「今宵の誕生会は実に盛大でござるな」

「そうですね。メラサル島を治めるホーレンス公爵のご息女の誕生会ですからね」

「でも、娘さんの誕生会でこんな盛大なものに参加するのは初めてよ」

「確かに、滅多にお目に掛からない規模でござるな。此度の王国会議でいくつかの案件を通すことができたから、公爵もさぞ機嫌が良いのでござろう」

「そうだったんですね」

「石川殿、あそこで複数の貴族に囲まれている淑女が見えますか？ 王都有数の大貴族リユール伯爵家の当主コロッコス殿を支える、次女のティラス様でござる。コロッコス殿とは石川殿も会ったのではなかったかな」

スギタニが視線で示す先を見ると、落ち着いた青色のドレスを着た年齢不詳な美人が、多くの若い男性貴族に囲まれていた。

陞爵式後の晩餐会で会ったコロッコスと同じ青い髪色の女性で、キリツとした目元が伯爵によく似ている。

「リユール伯爵家のティラス様ですか……」

「左様。国王様の第三夫人、レイラ様の妹でもある」

「はあ、とにかく凄い人ですね」

王族の血縁関係はいまいちピンと来ない良一は、曖昧な返事をする。

「今回の王国会議で、リユール伯爵家は王国東部の大要塞建設を受注したのはご存じか？
ホーレンス公爵もその案件では伯爵家に多大な支援を送っていたのでござる。その縁でテ
ィラス嬢が招待を受けたのでござろう」

「ああ、大要塞の建設を受注したんですね」

「他人事でござるな？ 石川殿の功績も多少は加味されているというのに……」

「なんですかそれ、聞いたことないですよ」

スギタニが言うには、王都に来るまでに立ち寄ったリード大双橋の魔導機修理が、思い
のほか会議でも重要視されたらしい。

作業に立ち会った、王国魔導学院の准教授、ササキナが絶賛したということだ。

「東の、亡者の丘 には王国も憂慮していて、いち早く要塞建設を進めるために大型魔導
機を大量に投入する予定だそうですな」

「王国も簡単には諦められないのね」

「それに、あの丘には財宝があるとわかっているのです、貴族達の進言も多いのでござ
るっ」

王国北東部とマアロの故郷であるセントリアス樹国の南部に面している、亡者の丘と
呼ばれる場所は、はるか昔にあった強大な王国の跡地らしい。

その王国は呪いで一夜にして滅びたものの、いまだに呪いは健在で、多数の亡者が闊歩

している危険な場所だ。

数年おきに、増えすぎた亡者が王国や樹国に襲い掛かってくるのが大きな問題になっ
ている。

「今まで、大型魔導機は壊れてしまえば処分するほかなかったが、修理が可能になれば、
より積極的な投資もできる。そこは石川殿の腕にかかっているわけですな」

「修理できるかわからないのに、随分と大きな信頼ですね」

スギタニは、また謙遜を、とでも言いたげな笑みを見せると、慌ただしく他の参加者の
ところへと挨拶に行ってしまった。

「キヤリーさん、貴族つてどんどん巻き込まれていくものなんですかね」

「良一君はかなり特殊な例だけだね。まあ、私からは頑張つてとしか言えないわ」

若干気落ちしながら会場に入ると、綺麗に飾り付けられた会場には色とりどりの料理が
並べられ、キリカへのプレゼントも高く積み上げられて、ちょっとした山になっていた。

「良一兄ちゃん、こっちこっち！」

モアが良一の姿を見つけて、ピョンピョンと飛び跳ねて手を振って呼ぶ。

良一が近づくと、キリカ專屬メイドのアリーナが深々とお辞儀して挨拶をした。

「石川士爵、本日はキリカ様の誕生会にお越しいただき、ありがとうございます」

「こちらこそ、招待してもらって嬉しいですよ」

「誕生会の開始まではまだ少し時間がありますが、先にキリカ様にお会いいただけるように手筈を整えてありますので、こちらへどうぞ」

アリーナに案内されて二階の部屋に入ると、綺麗なドレスに身を包んだキリカが椅子に座っていた。

「キリカちゃん、誕生日おめでとう」

「ありがとうモア、すごく嬉しいわ。誕生日はまだ先なだけど……お父様つたら、ご自分の都合で話を進めてしまうの。困ったものだよ」

「あー、まあ、色々あるんだろうね。気が早いけど誕生会だから、一応……誕生日おめでとう、キリカちゃん」

「良一もありがとう。気持ちを切り替えて私も楽しむつもりよ。皆も楽しんで」

誕生会が始まるまでの時間は少ししかなかったが、良一達はキリカにプレゼントを直接渡すことができた。

モアとメアからはお揃いのアクセサリー、マアロからはお守りなど、高価ではないがそれぞれ一生懸命に選んだプレゼントを受け取り、キリカはとても喜んだ。

再びアリーナに呼ばれ、良一達は一足先に会場に向かう。

しばらくすると、ホールにエスコートされてキリカが登場した。

幼いながらも凛とした佇まいのドレス姿を見て、あちこちでため息が漏れる。

一瞬の静寂の後、万雷の拍手が今日の主役を出迎えた。

「諸君、今日は私の娘キリカの誕生会に参加してくれて感謝する。たくさんの方々と今日という日を過ごせることを、娘も喜んでいる」

公爵の挨拶のあとは、テイラスが代表してキリカに花束を渡し、誕生会は和やかな雰囲気が始まった。

とはいえ、主役のキリカは有力な貴族達への挨拶で大忙しだ。

「やっとうモア達の所に来ることができたわ」

しばらくして、良一達の所に顔を見せたキリカの表情からは早くも疲労が窺える。

「えへへ、おかえり、キリカちゃん」

公爵と一緒に挨拶回りをしていると、相手方の貴族からキリカに対して孫や息子の婚約者にならないかと提案されることもしばしばあるらしい。だが公爵はその手の話題をのりくらりかわして、上手く立ち回っている。長く貴族の世界に身を置く彼の手腕と言えよう。

「やあ、石川君。キリカにプレゼントを贈ってくれたようだね。感謝するよ」

「いえ、妹と仲良くしてただいておりますし」

「君達には、娘の誘拐を防いでもらったし、大規模要塞の案件でも十分な寄与をしてもらった」

「少しでもお力添えできたなら、光栄です」
良一は今のところ要塞建設の件には一切関与していないが、日本人としての性なのか、謙遜と曖昧な言葉を返してしまふ。

「君ほどの将来性のある若者ならば、キリカを嫁がせても良いかもしれないな」

冗談とも本気ともつかない公爵の一言で、良一達とその周囲の参加者の空気が固まった。
「あ、あの、公爵様、それはなんと言いますか、恐れ多いと言いますか……」

「良一は私のことが嫌い？」

あろうことか、キリカまでもがこの会話に加わり、良一はしどろもどろになる。

「キリカちゃんも、悪ふざけは」

公爵家の婚姻話となると、貴族社会でも大事だ。キリカとの婚姻を狙っている家者ではなくとも興味津々に聞き耳を立てるので、会場はさらに静まり返る。

「娘と名前を呼び合う仲だったとは」

「いや、公爵様、これは……」

「お父様、良一とは遊びだけぐの関係よ？」

「なに、遊びだったのか!?」

「ち、違います！ キリカちゃんも誤解を招くような言い方はやめて——」

周囲の空気がいよいよ暴発しそうになった瞬間、青いドレスの女性が声をかけてきた。

立ち読みサンプル はここまで

「ホーレンス公爵、お戯れは程々に」

「テイラス嬢、彼の人となりは理解できたかね？」

「ええ。とても純朴で、王都のすれた貴族子弟よりも良い関係を築けそうだ」

テイラスと公爵は何やら納得の様子だが、取り残された形の良一は首を捻る。

「これは、なんだったんでしょうか？」

「いや、すまないね。こんな席だ、少しだけ悪ふざけしてしまつたよ。テイラス嬢に紹介をと考えていたのだが、その前に一芝居を打たせてもらった」

公爵のその言葉で、場の空気は一気に弛緩して、和やかな雰囲気に戻ってきた。

「私にも責任の一端がある。申し訳ない。改めて……リユール伯爵家の次女、テイラスだ。これから東部要塞建設の際には助力を願うかもしれないが、以後よろしく」

「石川良一です。よろしくお願ひします」

テイラスとの挨拶は簡単に名前を名乗るだけで終わり、その後公爵は彼女を連れて会場
の中心に戻っていった。

公爵達が完全に去った後、この場に残ったキリカが、良一を手招きして耳元で囁く。

「私は扱まないよ？」

良一は驚いて立ち上がり、誰かに聞かれていやしなやかと顔を真っ赤にして辺りを見回した。